

甘くて苦い神の言葉

ヨハネの黙示録一〇章一―二節

そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使は私に言った。「それを取って食べなさい。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」(9)

第七のラツパが吹かれる前、ヨハネは御使いから巻物を受け取り、それを食べました。御使いが告げたとおり、その巻物は口には蜜のように甘く、腹には苦いものでした。神の言葉は常に、蜜のような甘さと同時に苦さを併せ持つ、そのような二面性があります。信じる者たちにとっては喜びの知らせですが、これを拒む者たちには神の審きを告げることになるのです。このときヨハネは、救いと審きを告げる神の言葉をもう一度人々に語るようにと命じられました。今も教会で語られるみ言葉は、甘くて苦いものでなければなりません。私たちは出来れば苦い部分は取り除き、口に甘いみ言葉だけを受け取りたいと願うものです。しかし、福音を水で薄めたような安っぽい恵みを語ることは、教会にとって命取りになりません。甘くて苦い神の言葉を真摯に受け止める教会でありたいと願います。